

古典 大神楽舞

為真白山神社の大神楽舞は、莊嚴優美な神賑わいであって、神代における天ノ岩戸の舞になぞらえて組み立てたものと言われています。

この大神楽舞が現在のように整ったのは、江戸の中期のようあります。古老の伝えるところによりますと、源造という才知に優れ神代の故事にも詳しい器量者が、神楽舞の楽譜を整えそれに舞の振り付けを定め、村の若者に教えて奉納してからだと伝えられています。(平成18年に郡上市重要無形民俗文化財の指定を受けました。)

【大神楽舞の順序】

1. 鼓静め

鳥居の外で、まさに神苑に入ろうとして心静かに落着いて行進する。

2. 大道行

鳥居をくぐり神苑内に入り最も謹慎の態度で、笛も極めて緩やかな調べで行進する。先頭の薙刀ひねり・槍奴は梅鉢形をつくって行進する。

3. 宮廻り

まさに神社の大前に到着のころ笛も急調子になって、全員が喜び勇んで行進する。特に獅子は獅子奮迅の勢いで勇壮活発に進み大前で止まる。

4. 場ならし

既に大前に座を占め、これより種々の舞を奉納するため心を落ち着けようとする静かな舞である。

5. 東風屋(とうふや)

神社の大前で、極めて厳肅に且つ極めて面白く笛に合せて舞い、神様の御機嫌を伺い奉る。

6. 大神楽

緩調な舞であるがすこぶる複雑な舞である。

7. 中廻り

鼓静めの行進の舞で、ひと廻りして反対の位置に止まる。

8. 御嘉幸(おかげさき)

緩やかな調子で、落ち着いた舞である。

9. 吹き雜せ(ふきまぜ)

大神楽と御嘉幸を吹き混ぜた舞で、緩急の変化の激しい面白い舞である。

10. 早大神楽

大神楽舞の最も急調なもので、おかめ・金摺り・市兵衛・稚児など入り交じりつつ舞い回る。

11. 後雛子

種々の舞を舞い終わり、静かに神苑を退出するため心を落着ける舞。

12. 帰り御嘉幸

大前の舞を奏し終わり、退場する行進の舞であって、笛は極めて緩やかに名残惜しげに後を振り返りつつ大前を下がる舞である。特に獅子が頭を高く後を振り返りながら進む姿は、人々を感動させる場面である。

13. 田打ち

お鍬様の名残の田打ちは、元気の良い小学校児童が鍬男の指図により、笛に合わせ真剣に踊るさまも見どころである。